

平和を作り出す

川 上 信

奨励者紹介[かわかみ・しん]

日本キリスト教団八日市教会牧師

八日市めぐみ保育園園長

イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた。

「心の貧しい人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

悲しむ人々は、幸いである、

その人たちは慰められる。

柔和な人々は、幸いである、

その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渴く人々は、幸いである、

その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は、幸いである、

その人たちは憐れみを受ける。

心の清い人々は、幸いである、

その人たちは神を見る。

平和を実現する人々は、幸いである、

その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

(マタイによる福音書 5章1―12 節)

おはようございます。川上信と申します。しばしの間、よろしくお付き合いください。

2008年今出川キャンパスの水曜チャペル・アワー、2013年に京田辺キャンパスの水曜チャペル・アワーで、また2018年に今出川キャンパスでの火曜チャペル・アワーに続いて、今日、こうしてみなさんの前でお話をさせていただく機会を与えられたことをうれしく思います。今年は2023年ですから5年おきに呼んでいただけるのかな、なんて思ったりして今日も来させてもらいました。

平和って？

ご依頼をいただいた時に、水曜チャペル・アワーの秋学期統一テーマは、「悪を避け、善を行い 平和を求め、追求めよ。」（詩編 34 編 15 節）だとお知らせくださいました。

「そうか、平和か」と思った時に、まず、最初に思い浮かんだ聖書箇所が、先ほどお読みいただいたマタイによる福音書5章9節でした。みなさんもよくよくご存じの聖書箇所だと思いますが、山上の垂訓（ないし山上の説教）の1節として有名な「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」（口語訳）です。

ぼくはこれまで、このイエスの語られた説教の箇所を読むたびに、なにか違和感というか何かしっくりこないものを感じてきました。何にしっくり来ていないのかを自分なりに分析してみたところ、9節以外の大半の箇所は、「心の貧しい人々」とか「悲しむ人々」とか「義に飢え乾く人々」と前半は、決してうれしくない、正直言うと出来ることなら避けたいな、イヤだなと思ってしまうような主語がつき、でもその結びは「幸いである。」という逆説的な言葉で締められているから、なのではなく、実はしっくり来ていない本当の理由は、他の節はそうでありながら、9節の「平和をつくり出す」（新共同訳では「平和を実現する人々」となっていますが、僕は口語訳の「つくり出す」の方がしっくりくるので、その訳を使いますが）は、肯定的な言葉に、肯定的な結びという一文になっているからなのかなと思います。

そこで思うのは、「平和ってつくるものなのか」という漠然とした疑問です。ぼくたちは「戦争を知らないこどもたち」として生きています。小競り合いや他国の状況を見ていると決してすべてが平和だと言えないような現実もありますが、少なくともこの日本においては、戦争を何十年もしていないので、平和という定義が当てはまるように思えます。しかし、毎年年間数万人もの人が自殺している社会であるのも現実です。平和というのは「いのちを尊ぶ」ことだとすると、今の日本は平和だということなのでしょう。みなさんはどう思われますか。

辞書で「平和」を調べてみると、「一般には社会の状態が戦争や内乱、騒擾（そうじょう）などで乱れていないこと。現実的には国家の抑止力が内外の脅威を抑止している状態の事」と書かれていました。つまり歴史学的には戦間期を指しています。どんな字を書くかというと戦と戦の間の期間、なので英語ではPeaceと同義としてinterwarも平和を表すと辞書にも書かれていました。それぞれの辞書によって解釈があるので、英語の堪能な方は、それはニュアンスが違うと言われる方もおられるかもしれませんが、戦争終結から次の戦争開始までの間を意味すると記されていました。これを見ていてまたまた違和感がありました。「えっ!?ちょっとまてよ、これじゃぼくたちの生きる世の中の前提になるのは戦いありきの世界で、つまり世の中が平和であるってことは通常の状態ではないってことになるよな」って思ったのです。確かに世界の歴史や日本の歴史を見ても、その歴史のあちこちで人は人と争いをつづけていて、どの戦いが何年に起こり、どの戦争の勝者がどちらで、どこがどこを支配するようになったということが時代の節目、つまり歴史の根底には戦いがあるように思うのです。つまり強い者が、弱い者を力で言うことを聞かせて支配して、世の中ってものは

平和って！

話は少し変わりますが、先日TBSのニュース 23 という番組で、子どもの権利擁護のための優れた活動をしている若者に贈られる「国際子ども平和賞」を受賞した大阪に住む川崎レナさんという 17 歳の少女が紹介されているのをたまたま見ました。彼女がインタビューを受けているシーンで印象に残ったのは、「子どもは未来ではなく今を生きている」という言葉でした。その真意は、大人は平和を語る時に「未来を生きる子どもたちのために」という前置きを言いたがるが、「わたしたち子どもも、今の時代を生きているのだから、今、子どもとして平和を考えることはとても大切なことなんです」ということだったのです。しっかりした子だなと思いました。こんな国際的な賞を取っているのだから当たり前なのですが・・・。

ぼくは、保育園の園長としての働きも持っています。それなので、毎週水曜日に保育園の3歳～5歳の子どもたちと合同礼拝を守っています。今日はその水曜なのですが、母校である同志社大学のたつての頼みだったので、園児たちの礼拝は明日にしてもらって、今日は来させてもらいました。譲ってくれた子どもたちに感謝してくださいね。決して恩着せがましく言っているわけではありませんので、みなさんお気になさらないでくださいね。

こどもの平和理解って！

まあ、軽口はさておき、その園児たちとの礼拝で、以前に今日のように「平和」についてお話をしようと思って、ちょっと威厳をもった面持ちで「平和って、人が喧嘩をしないことを言うんだよ。だから喧嘩をやめるためにはどうしたらいいと思う」と問いかけてみたのです。最初は、園長何言っているんだという顔をして子どもたちはぼくを見ていたので、「喧嘩する時ってさ、そうそう、こんな風に手をグーにして叩こうとしてきたら、みんなならどうする」って聞いてみたら、ひとりの子が「う～ん、パーを出す」って言ったんですね。「なんでやねん、ジャンケンちゃうねん、たしかにグーに勝つのはパーやけどな」って言ったら、その子が「手パーにして握手するねん」って言ったのです。すごくないですか。喧嘩をやめるには、どうしたらいいのか。その答えがパー出して握手する。ほんとに感心する言葉にびっくりして、そのあと、ぼくはしどろもどろになって何を子どもたちにお話ししたかを覚えてないくらいの衝撃を受けました。でも、ほんとにすごいでしょ、うちの保育園の子どもです。自慢です。この子には「国際子ども平和賞」なんてすごい賞をぼくは与えてあげることが出来ませんが、こうしたたくさんの人に「すごいでしょ」ってお話することで、彼の素晴らしい答えをほめたたえたいと思って紹介しています。

平和を希求しての学び

ぼくたちの保育園は、日本キリスト教保育所同盟という団体に加盟していて、ぼくは、その同盟（略して「キ保同」といいますが）の事務局で研修担当というお役をいただいています。そのキ保同が大切にしている理念は「いのち・人権・平和」というものです。この言葉にぼくたちキリスト教保育を行っているものが大切にしてきた思いが集約されているのです。一言でいえば、「いのち」は神さまが創造された大切な賜物。その賜物の「いのち」を大切にするのが「人権」を守ること。そしてその人権が守られる社会を作っていくことが「平和」を作るということなのだと考えているのです。そして、それを子どもたちと共有するための研修として、キ保同

めに沖縄の辺野古に行ったり、沖縄の戦跡をめぐったりして、沖縄で戦争に反対する人たちが何故、その想いに突き動かされているのかを感じる研修をしています。また、東日本大震災で原発の放射能に侵された福島県の保育園を訪ね、その地で生きる人たちの想いを聞き、その場に立つことでその想いを肌身を感じる、そんな研修を企画しています。保育の理論や保育実践のため、子どもの心、保護者の思いを学ぶことも大切なのですが、ぼくたちキ保同は、頭で考えるだけでなく、とにかく行ってみる、そしてそこで感じたことを胸に、子どもたちと向き合うということを大切に考える研修を行っています。

先日、コロナ禍で中断していた沖縄の研修を復活させるために、その下見ということで沖縄に行ってきました。その時は、沖縄県知事選挙の最中でした。辺野古の新基地反対を掲げた翁長雄志知事の遺志を継いで、その後任として知事を一期務めあげた玉城デニーさんが、開票されてすぐに当選確実が報じられました。今でも沖縄は、基地の問題を含めた「平和」という視点が廃れてないのだなとつくづく思われました。その平和を脅かす米軍基地を推し進めたのが、旧統一教会から多額の献金を受けていた安倍政権です。その意思にはっきりと否を突き付けている玉城デニー知事が再選したのは、安倍政権を引き継いでいる現岸田政権に対するはっきりとした沖縄の民意だと感じました。まさに、平和を作るための不断の努力が必要なのだと思わされる光景でした。沖縄の辺野古の反基地闘争の働きをみても、ぼくはこの時イエスが語られたのは「平和は待っていて与えられるものではなく、努力して苦労して作っていくもの」ということだったのだと改めて思ったのです。「心の貧しい人」「悲しむ人々」と同じように辛い営みを乗り越えたものだからこそ、神の子と呼ばれるとイエスは言われたのだと悟ったのです。平和を保つためには抑止力としての軍事が必要という考え方は、決してその根本的な解決を導き出さないのだと言うこと。そしてその平和をつくりだしていくためには、とても長い月日を非暴力で座り込みの闘いを続けてこられているおじーやおばーがいてくれたからだということを忘れてはならないのだと思いました。ぼくたちが本当の平和をつくりだしていき、神の子だと言ってもらえる生き方をしていくためには、何をしなければいいのか。何を大切にしていかなくてはならないのかをぼくたちは他人を責めるのではなく、自分に問うていきたいと思うのです。それぞれの自分の場で何が出来るのかと。

2023年1月11日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録